

歴史

石川亮太 (立命館大学)



金秀姫 著

『近代のイワシ、帝国のイワシ——イワシを通じて見た朝鮮の漁業文化と漁場略奪史』(アカネット、2015年12月)

김수희 지음 『근대의 멸치, 제국의 멸치 — 멸치를 통해 본 조선의 어업 문화와 어장 약탈사』 (아카넷, 2015년)

韓国の海岸部を旅行すると、魚の呼び名をはじめ、漁業に関して今でも多くの日本語が使われていることが分かる。開港から植民地時代にかけて、朝鮮の沿岸漁場では多くの日本人漁民が活動し、漁法はもちろんのこと、魚食文化に至るまで多くの影響を残した。

本書はイワシを例に、漁業をめぐる近代の日朝関係を描いた作品である。イワシの煮干しや塩辛は現代の韓国料理に欠かせない食材となっているが、著者によれば、そうなったのは植民地時代のことであり、それ以前は全国どこでも使われる食材ではなかった。

第1章「朝鮮ではイワシを何と呼んだか?」、第2章「朝鮮ではイワシをどのように捕っていたか?」では、主に朝鮮時代のイワシをめぐる食文化や各地の伝統漁法について取り上げている。主に南海岸から東海岸にかけて漁獲され、腐敗しやすいイワシは、朝鮮時代のソウルでは必ずしもポピュラーな魚ではなかったようで、士大夫の随筆には「病を呼ぶ魚」とも記されているという。ソウル周辺では、イワシではなく、ツマリエツ(반지)の塩辛が専ら用いられていたというのも、当時の食文化の多様さを窺わせて興味深い。

第3章から第5章までは開港後、植民地化に至るまでの時期(いわゆる開港期)を主に取り上げている。朝鮮沿海でのイワシ漁業が本格化したのは、この時期の日本人漁民の進出によるものであった。第3章「日本漁民はなぜ朝鮮の海に渡ってきたか」は、日本人漁民の出稼ぎ漁業の始まりから現地定着までの過程を、送り出し元の漁村や日本市場の事情に即して説明する。第4章「日本政府はなぜ朝鮮漁業を奨励したのか」では、そうした漁民の活動を支えた明治政府の役割に注目する。1900年代から朝鮮沿海には移住漁村と呼ばれる日本人漁民の根拠地が叢生するが(著者は「植民漁村」と呼ぶべきだとする)、そのきっかけはロシアとの対抗を念頭に置いた日本政府の奨励政策にあった。第5章「江原と済州ではなぜイワシ漁業が栄えたのか」では、日本人の操業に伴って生じた摩擦と朝鮮人漁民の従属化について詳しく取り上げている。

第6章「日帝はどのようにして朝鮮漁場を独占したのか」では、1923年頃に突如はじまり30年代末まで続いた、朝鮮東海岸へのイワシの大回遊を取り上げ、それが機船底曳網漁の普及を促し、さらに日窒ほか日本資本の魚油工場の進出を誘発したことを述べる。巻末の附録「韓日のイワシ食文化」では、現代の様々なイワシ食文化を紹介しつつ、朝鮮でのイワシ塩辛の普及が植民地期の1930年代以後に起きたことに言及する。

このように本書は主に植民地時代の終焉までを取り上げているが、その後、日本人の残した漁法や魚

食文化はどのような形で受け継がれていったのか。さらに知りたいところである。第6章では、1930年代の資本制的なイワシ漁業について、担い手はもっぱら日本人であったとし、解放後との断絶を強調している。しかし漁業全般を見れば、日本から持ち込まれた漁法が、朝鮮の自然環境にあわせて改変されながら、朝鮮人のものとなっていった例もある。例えば有明海の漁民が持ち込んだ鮫鱈網（あんこうあみ）は、同じく干潟が広がる朝鮮西海岸で、アンガンマン（안강망）として改良を加えられつつ現在も利用されている（片岡千賀之『長崎県漁業の近現代史』長崎文献社、2011年ほか）。

食文化については、本書の序言で興味深い例が紹介されている。細い小麦麺を煮干しの出汁に浮かせたチャンチクス（찬치국수）は、長寿を祝う席で出されるなど、代表的な朝鮮料理のように思われているが、実際には朝鮮戦争の避難民が、かつて日本人のイワシ漁業の根拠地であった釜山で、配給の小麦粉を使って作ったことで普及したものだという。沖縄そばが米軍の放出小麦を通じて普及したというエピソードが連想される。解放後の人々の暮らしのなかでイワシがどう利用され、新しい「伝統」として定着していったか、朝鮮半島の北半部を含め、さらに詳しく検討する価値があろう。

ところで本稿で「イワシ」とした語は、原書ではミョルチ（멸치）と表記されており、正確にはカタクチイワシとしなければならない。実際に本書の第1章から第5章まではカタクチイワシを取り上げているが、第6章のみマイワシ＝チョンオリ（정어리）を話題としている。これについて著者は、「わが国ではミョルチとチョンオリを別のもものと見なすが」、日本人はこれらを仲間に属するものと考えていたので、本書でも併せて取り上げるのだと説明する。身近な事物をどう分類するか、その違いは、世界の見え方の違いと言ってもよい。両国の魚を大いに食べながら、対話を深めてみたい。